

『大英帝国衰亡史』中西輝政、PHP 出版、1997 年（絶版？）

## 第五章 自由貿易の呪縛

国際競争力を急速に失う

一八七〇年代以降のイギリス＝対米・対独輸出が急減

イギリスが先行した産業革命の秘訣が、追随国に模倣された結果

《国内の反応》

自由貿易主義の修正＝公正貿易（フェア・トレード）、相互主義（レシプロシティ）

ブロック経済論＝特惠関税地域構想（1903、しかし世界恐慌時まで実現せず）

植民地経済への依存＝植民地の拡大、インド経済への傾斜

一国世界覇権からの後退＝日英同盟、英仏・英露協商

イギリスの自由貿易を守ったのは、シティの金融業界と労働組合（保護貿易による食料価格高騰に反対）であった。

## 第六章 「ボーア戦争」の蹉跌

1899 年 10 月～ 金鉱獲得の野心を、「適者生存」の世紀末的論理と「原住民差別」との闘いという美辞麗句で包んだ戦争

○史上初のコンセンレーション・キャンプ（強制収容所）

○組織化された集中配備、系統的な補給、圧倒的火力による損害を恐れぬ正面突破＝第一次大戦の前哨戦

○フランス、ドイツからの批判

○国内世論の分裂、自由党の分裂衰退の原因

○親ボーアの論を挙げるロイド＝ジョージと、戦争特派員として脚光を浴びるチャーチルの登場

帝国支配の正当性、イギリスの国家的道義に対する確信が揺らぐ戦争

アメリカ独立戦争以来の国論分裂。家庭内で親と子が論争する事態

1901 年 1 月、ヴィクトリア女王死去。1903 年、ソールズベリー首相（ロバート・ガスコイン＝セシル。ウィリアム・セシルの直系子孫）死去

## 第七章 アメリカの世紀へ

○モンロー宣言 1823 イギリスは共同声明を提案したが、アメリカはまだ小国なのに単独で宣言

○南北戦争 1861- 南部に傾斜するイギリス政府への世論の批判、パーマストーン首相は介入を見送る。北部は圧倒的な陸軍動員力をこの戦争で見せつける。覇権国へのチャレンジャーを分断する機会を逃す

○1890 年、アメリカ海軍はチリ海軍よりも小さかった→10 年のうちに世界 3 位の海軍国に

フレデリック・ジャクソン・ターナー『米国史におけるフロンティアの重要性』1893

アルフレッド・セイヤー・マハン『海軍力の歴史に及ぼす影響（海上権力史論）』1890

両著はアメリカがフロンティアを海外に求めて、海軍力を増強するべきと主張

○1895年 ベネズエラと英領ギアナとの国境紛争。アメリカの強制的仲裁権の主張をイギリス拒否、英米戦争の危機

○同時期、イギリスのボーア人侵略行為に対してドイツがあからさまにボーア人を支持→アメリカよりもドイツが脅威とみたソールズベリーは、モンロー宣言をしつしぶ認める。

○バルフォア「アメリカとの戦争は内戦と同じ」

新しい世代の政治家は、アメリカを過度に信頼する政策に傾く：血の紐帯論

パナマ運河の建設をアメリカにすべて譲渡、カナダ人の要求を斥けてアメリカ国境問題を譲歩、アメリカのキューバ支配・フィリピン領有を好意的に容認、1907年、カナダハリファックス軍港から全面撤退（南北アメリカ大陸の軍事をアメリカに委ねる）

○ドイツの脅威に対抗するためにアメリカに全面譲歩する、あまりの「性急さ」は、イギリス外交の伝統から外れていたのでは？

○ドイツ包囲網に集中→もがくドイツのリアクションを強める

イギリスのアメリカへの譲歩は、第一次大戦で見返りをもたらさなかった。ウィルソンは大戦の末期までイギリスの参戦要請に応じず、両陣営と貿易して漁夫の利を得た。

イギリスはグローバルな視野を失い、ヨーロッパの均衡に過度に集中して失敗した

## 第八章 改革論の季節（略）

## 第九章 悲しみの大戦

## 第十章 ロレンスの反乱（略）

「イギリスは世界大に広がる帝国の運命を、いわば、どう転ぶかわからない大陸での戦闘の帰趨に賭けた」

○フランスとの軍事同盟→弱体化が明らかなフランスがドイツと戦争になれば、イギリスは自動的に大陸で参戦する。しかも軍事的な裏打ちがない。

○1914年の時点で、50歳以下であったイギリス貴族の約20%が戦死

○イーデンやマクミランの同級生であったオックスブリッジの友人たちの3人に1人が死んだ。→イギリス・エリートの「階層としての死」

○1922年のウェンブリー大英帝国博覧会では、まじめなパビリオンではなくジェット・コースターやアミューズメントセンターが人気であった。刹那的な戦後時代。明るい未来が描けない時代。

ウォルター・リップマン「人類の歴史上どのような帝国も、その中心に、確信に支えられて統治を担うエリートをなくして長く生きのびた例はない」

## 第十一章 “バトル・オブ・ブリテン”、そしてフル・ストップへ

## 第十二章 旗の降りる日

1940年5月、チャーチル「勝利、いかなる対価を払っても勝利を」 Victory, Victory at all cost

○バトル・オブ・ブリテンののちに至っても、大英帝国には「別の戦い方」を選択する可能性がありえたように思われる。それはイギリス本土への究極の脅威を撃退したあと、イギリスの・・長期的な存立基盤の維持に見合うかたちの戦争形態を・・とくに輸出によるギリギリのレベルでの外貨獲得と財政の確立によって一究極まで追求するやり方

○1940年夏、イギリス戦闘機の主要部品はすべて外国製品であった。1940年9月、イギリス大蔵省とイングランド銀行は、この年の終わりまでにイギリスの外貨準備が底をつくと報告した

○1938年、イスメイ帝国国防委員会事務局長「あと一年時間をかせげれば、ドイツ空軍の襲来をギリギリしのぐだけの防空戦力を築くことができる」戦闘機の配備、レーダー網の整備を準備するために、チェンバレン宥和政府は時間をかせぎをした

○チャーチルの選択は、「ルーデンドルフの選択」=敵に勝つために国力を顧みない選択

○1941年3月レンド・リース法。1941年初めのイギリスの国際購買力はほぼゼロ、アメリカから物資を無制限に貸与される。ただし貸与された物資を用いて生産したあらゆる製品、さらには純国産であっても同法によって供与された物資と「似た」製品は、いかなるものもイギリスから輸出することを禁じる。=純粋な軍事援助以外への物資の転用は禁止、アメリカは監視役を派遣する。イギリスは戦争の勝利のために対米債務を一方的に膨らませ、戦後の帝国経済を考えない「フル・ストップ」に踏み切った

○1945年8月17日、アメリカはレンド・リース法を打ち切り。

○1945年秋、アメリカはイギリスに37億5千万ドルの有利子借金を、ポンドの交換性回復と「帝国特惠関税」の撤廃を条件に提案。ケインズらの希望した無償贈与あるいは無利子貸与は却下。スターリング・ブロックは崩壊し、対外資産は全て失い、イギリスには有利子負債だけが残った。

○戦後、イギリスは輸出による外貨獲得と世界各地への軍事費によって、国民は窮乏生活が続いた。戦勝国となってしまった帝国が、国家の重荷となった

○スエズ動乱：米ソから批判され、国内は猛反対し、スエズ運河を手放す大敗北。大英帝国を放棄することを躊躇した政治家が思い知った現実。大英帝国は解体し、経済は凋落し、「帝国がなければニンジンとジャガイモを食べるしかない国」（ジョージ・オーウェル）に戻ってしまった。

#### 《大英帝国のIF》

○アメリカが覇権国となるのは阻止できないとして、少なくとも大英帝国と世界を二分することができたろうか？

○ドイツ帝国と妥協し、第一次大戦を避けられたらろうか？

○ナチスドイツを封じ込めながら、大英帝国を維持できたらろうか？